

# 中学生における対人ストレスコーピングが 心理的ストレス反応に及ぼす影響の検討

下田 芳幸

Relationship between interpersonal stress coping and  
psychological stress responses among junior high school students.

Shimoda, Yoshiyuki

E-mail : shimoda@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：対人ストレスコーピング，心理的ストレス反応，中学生

keywords : interpersonal stress coping, psychological stress responses, junior high school students

## 問題と目的

本研究は，中学生における対人ストレスコーピングが心理的ストレス反応に及ぼす影響を検討したものである。

人は日々，様々なストレスフルな出来事を体験するが，頻繁に遭遇する出来事の一つに，対人関係に起因する対人ストレスイベントがある（Maybery & Graham, 2001）。対人ストレスは発達課題に直面していく上で不可避のものであり（Seiffge-krenke & Shulman, 1993），また経験頻度も多く，心理的ストレス反応の表出といった心身への影響度も大きいことが分かっている（橋本，1997；岡安・嶋田・丹羽・森・矢富，1992；尾関，1993）。したがって，このような対人ストレスイベントへの対処のメカニズムを明らかにすることは，心身の健康増進を図る上で非常に重要であるといえる。

このような対人ストレスで生じた心理的ストレス反応を低減するために行われる対処行動（コーピング）のうち，当該の対人関係をターゲットとして行われるものは対人ストレスコーピングと呼ばれる（加藤，2000）。この対人ストレスコーピングは「積極的に話をするようにした」など，積極的に当該の対人関係を改善・維持することを試みる「ポジティブ関係コーピング」，「無視するようにした」など，その対人関係を一時的あるいは長期的に放棄・解消することを目的に実行される「ネガティブ関係コーピング」，そして「自然の成り行きにまかせた」など，問題を一時的に棚上げするといった「解決先送りコー

ピング」の3つに分類されることが先行研究で示されている（加藤，2000，2003）。

またこれまでの大学生を対象とした研究から，ポジティブ関係コーピングは心理的ストレス反応を高める（加藤，2006a）または低減しない（加藤，2001a，2001b）が，友人関係の満足度を高めること（加藤2001a），ネガティブ関係コーピングは心理的ストレス反応を増加させること（加藤2001a），解決先送りコーピングは心理的ストレス反応や孤独感を減少させること（加藤2001a，2002a）などが明らかとなっている。しかし，他の発達段階における対人ストレスコーピングの検討はなされておらず，その特徴は明らかとはいえないのが現状である。

ところで文部科学省（2009）によると，平成20年度の中学生の不登校生徒数は105,328人であり，約34人に1人という高い割合で存在する上，平成13年度から続いていた減少傾向が，平成18年度以降増加に転じている。小学生の不登校生徒数は23,926人，1学年あたり約4,000人である一方，中学生は35,000人強であることから，中学生の学校不適応に対する心理的援助が極めて重要であるといえる。そして中学生における不登校のきっかけとしては，いじめといじめを除く友人関係をめぐる問題が約4分の1を占めており，対人関係が大きな要因であることがうかがわれる。

さらに文部科学省（2008）によると，中学生における平成19年度の生徒間暴力の発生件数は18,129件であり，小学生の2,933件，高校生の6,512件と比較しても圧倒的に多いことが分かる。これら実態

調査による現状を踏まえると、中学生の学校不適応の予防・改善のために、対人関係のスキルを向上させることが急務の課題といえる。

またこのような対人関係トラブルは、誰もが日常的に感じる学校ストレスに起因していることが指摘されており（岡安，1994），一般的な不適応感のみならず，不登校傾向（菊島，1999；野島・三好，2004）や非行（藤野，1996；鈴木，1988，1989）と心理的ストレスの関連が実証されている。

さらに社会的スキルと心理的ストレス反応との関連も示されていること（例えば飯田・石隈，2006）を踏まえると，対人関係スキルの一つである対人ストレスコーピングの，中学生における特徴を把握することは，evidence に基づいた対人関係のスキルの向上に寄与し，中学生がより円滑な対人関係を築き，より適応的な学校生活を送る上で有効であると考えられる。しかしながら，中学生の対人ストレスに関しては，ストレスイベントの分類とコーピングとの関連を検討したもの（藤村・平野・藤猪・服部・金子・村松，2007）などは見られるものの，対人ストレスコーピングの視点から検討したものは見当たらない。

そこで本研究は，中学生における対人ストレスコーピングの特徴を明らかにすること，具体的には，成人を対象に作成された対人ストレスコーピングの中学生における因子的妥当性を確認するとともに，対人ストレスコーピングが心理的ストレス反応に及ぼす影響を検討することを目的とした。

## 方 法

**調査協力者** 北陸地方の複数の中学校の2年生195名であり，そのうち以下に述べる質問紙に記入ミスのなかった181名（男性84名，女性97名）を分析対象とした。

**実施時期** 2008年10月であった。

**手続き** 本研究では，対人ストレスコーピングおよび心理的ストレス反応を測定するために，以下の尺度を使用した。調査は，中学2年生を対象とした，人間関係を考えることを目的に開催された研修会の一部を利用して行われ，調査の目的・回答が任意であることを説明したうえで，一斉に実施・回収した。

(1) 対人ストレスコーピング：加藤（2000）

が作成した対人ストレスコーピング尺度の短縮版（加藤，2002b）を使用した。本尺度は「ポジティブ関係コーピング」，「ネガティブ関係コーピング」および「解決先送りコーピング」の3下位尺度（各5項目）で構成されている。対象は大学生であるが，内容は中学生でも理解可能であると判断した。本尺度では対人ストレスの説明をしたあとに，「あなたは，実際に経験した人間関係のストレスにたいして，普段，どのように考えたり，行動したりしますかと教示し，各項目について4件法（よくあてはまる，あてはまる，少しあてはまる，あてはまらない；3—0点）で回答を求めた。(2) 心理的ストレス反応：岡安・高山（1999）の中学生用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）のうち，心理的ストレス反応の部分を使用した。本尺度は不機嫌・怒り感情，抑うつ・不安感情，無気力的認知・思考，身体的反応の4下位尺度（各4項目）で構成されている。自分の最近の様子について，各項目に4件法（非常にあてはまる，かなりあてはまる，少しあてはまる，まったくあてはまらない；3—0点）で回答を求めた。

## 結 果

本研究では，帰無仮説の棄却を危険率5%水準で判断した。また分析にはSPSS 17.00を使用した。

### 対人ストレスコーピング尺度の因子構造

先に述べたように，対人ストレスコーピング尺度（短縮版）の中学生における妥当性・信頼性はこれまで検討されていない。そこで，対人ストレスコーピング尺度の中学生における因子的妥当性を検討するため，短縮版対人ストレスコーピング尺度の15項目について，最尤法，プロマックス基準の回転による因子分析を行った。結果をTable 1に示す。

分析の結果，固有値が1以上で3因子が抽出された。抽出された因子数，および各因子に含まれる項目とも加藤（2002b）と同じであったため，先行研究と同様に，それぞれ「ネガティブ関係コーピング」「ポジティブ関係コーピング」そして「解決先送りコーピング」と名づけた。また，各因子における項目の合計得点を元に信頼性係数を算出したところ， $\alpha=.81-.87$ であったことから，本尺度は十分な内的整合性を有していると判断された。

Table 1 対人ストレスコーピングの因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
<b>1. ネガティブ関係コーピング (<math>\alpha=.87</math>)</b>				
話をしないようにした	<b>.910</b>	-.027	-.017	.818
無視するようにした	<b>.782</b>	.118	-.013	.618
かかわりあわないようにした	<b>.781</b>	-.121	.048	.647
人を避けた	<b>.666</b>	.109	-.033	.439
友だちづきあいをしないようにした	<b>.663</b>	-.006	.002	.440
<b>2. ポジティブ関係コーピング (<math>\alpha=.81</math>)</b>				
相手の気持ちになって考えてみた	-.151	<b>.772</b>	.075	.661
人間として成長したと思った	.152	<b>.742</b>	-.036	.551
積極的に話をするようにした	-.003	<b>.677</b>	-.011	.453
相手の良いところを探そうとした	-.093	<b>.617</b>	.055	.415
この経験で何かを学んだと思った	.193	<b>.556</b>	-.018	.337
<b>3. 解決先送りコーピング (<math>\alpha=.81</math>)</b>				
そのことにこだわらないようにした	-.067	.014	<b>.858</b>	.711
気にしないようにした	.178	-.131	<b>.743</b>	.615
あまり考えないようにした	-.038	.014	<b>.591</b>	.342
何とかかなと思った	-.112	.095	<b>.568</b>	.344
こんなものだと割り切った	.104	.083	<b>.563</b>	.414
因子間相関	因子 2	.006		
	因子 3	.351	.404	

Table 2 各尺度の男女別の平均値 ( $M$ ), 標準偏差 ( $SD$ ) および平均値の差の検

	男子 (N=84) $M (SD)$	女子 (N=97) $M (SD)$	$t$ 値
対人ストレスコーピング			
ポジティブ関係コーピング	6.35 (4.31)	4.80 (3.63)	2.620
ネガティブ関係コーピング	2.88 (3.76)	3.28 (3.52)	-.740*
解決先送りコーピング	6.12 (3.95)	5.41 (4.16)	1.168
心理的ストレス反応			
不機嫌・怒り感情	3.22 (3.82)	4.20 (3.59)	-1.777
抑うつ・不安感情	1.64 (2.74)	3.02 (3.86)	-2.750*
無気力的認知・思考	3.52 (3.32)	3.95 (3.23)	-.871
身体的反応	2.53 (3.34)	3.15 (3.23)	-1.253

\* $p<.05$

## 対人ストレスコーピングおよび心理的ストレス反応の記述統計

対人ストレスコーピングおよび心理的ストレス反応の記述統計を Table 2 に示す。先行研究で心理的ストレス反応の性差が数多く報告されているが、対人ストレスコーピングの性差は明らかとなっていない。そこで、両尺度の下位尺度得点における性差を検討するため、 $t$  検定を行った。

その結果、対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピング得点では男子が、また心理的ストレス反応の抑うつ・不安感情得点は女子が、有意に得点が高かった（順に  $t=-2.75$  ;  $t=2.62$ , いずれも  $p<.05$ ）。

## 対人ストレスコーピングが心理的ストレス反応に及ぼす影響

対人ストレスコーピングが心理的ストレス反応に及ぼす影響を検証するために、心理的ストレス反応の各下位尺度得点を基準変数、対人ストレスコーピングの各下位尺度得点を説明変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を、男女別に行った。結果を Table 3 に示す。

分析の結果、女子における無気力的認知・思考のみ、重相関係数が有意でなく、女子の無気力的認知・思考を対人ストレスコーピングによって説明するのは不適であることが示された。

その他の基準変数における重相関係数はいずれも

Table 3 対人ストレスコーピングを説明変数、ストレス反応を基準変数とした重回帰分析結果

説明変数		基準変数							
		不機嫌・怒り感情		抑うつ・不安感情		無気力的認知・思考		身体的反応	
		$\beta$	$t$	$\beta$	$t$	$\beta$	$t$	$\beta$	$t$
男子 (N=84)	ポジティブ関係C	—	—	—	—	—	—	—	—
	ネガティブ関係C	.438	4.46	.552	6.07	.301	2.89	.462	4.77
	解決先送りC	—	—	—	—	—	—	—	—
	$R(R^2)$	.438	.192	.552	.305	.301	.090	.462	.213
女子 (N=97)	ポジティブ関係C	.291	3.18	—	—	—	—	.328	3.62
	ネガティブ関係C	.391	4.26	.353	3.64	—	—	.382	4.21
	解決先送りC	—	—	—	—	—	—	—	—
	$R(R^2)$	.478	.229	.353	.125	—	—	.494	.244

C：コーピング

有意であり、対人ストレスコーピングが心理的ストレス反応に影響を及ぼすことが明らかとなった。男子については、ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングは、心理的ストレス反応のいずれも増加または低減していなかった。一方、ネガティブ関係コーピングは、全ての心理的ストレス反応の表出を高めていた ( $\beta=.301-.552$ )。女子については、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピングともに、不機嫌・怒り感情と身体的反応の表出に関与していることが示された (順に、ポジティブ関係コーピング： $\beta=.291, .328$ ；ネガティブ関係コーピング： $\beta=.391, .382$ )。さらにネガティブ関係コーピングは、抑うつ・不安感情の表出にも関与していることが示された ( $\beta=.253$ )。一方解決先送りコーピングは、男子と同様に心理的ストレス反応に影響を及ぼしていなかった。

## 考 察

本研究の目的は、中学生における対人ストレスコーピングが心理的ストレス反応に及ぼす影響について明らかにすることであった。

### ポジティブ関係コーピングについて

分析の結果ポジティブ関係コーピングは、男子では心理的ストレス反応の表出に影響しておらず、女子では不機嫌・怒り感情と身体的反応の表出に影響を及ぼすことが示された。先に述べたように大学生を対象とした研究では、ポジティブ関係コーピングは心理的ストレス反応を高める (加藤, 2006a) または低減しない (加藤, 2001a, 2001b) ことが示されている。したがって本研究結果は、概ね先行研究と同様の結果であったといえる。

ポジティブ関係コーピングは、相手との関係性の改善・維持のために自分の感情や欲求を抑えるといった側面があり、そのためにストレス反応が生じる場合があることが先行研究で実証されている (加藤, 2006, 2008)。先行研究では性差に関する検討はなされていないが、このような傾向は、中学生では女子において顕著なのかもしれない。

このようにポジティブ関係コーピングは、心理的ストレス反応を低減しないまたは高めてしまう可能性がある一方で、友人関係の満足度を高めたり (加藤2001a)、ソーシャルサポートを増加させた結果として孤独感を低減すること (加藤, 2006a) に寄与している。すなわちポジティブ関係コーピングについては、心理的ストレス反応の低減といった直接的な効果と、ソーシャルサポートの増加などの間接的な効果とに分けて考える必要性があるといえる。そして、間接的な効果が期待されることから、心理的ストレス反応を直接低減しない場合でも、ポジティブ関係コーピング自体は実行されたほうが望ましいと考えられる。

ただし女子においては、ポジティブ関係コーピングにより心理的ストレス反応が高まってしまうことから、実行が次第に抑制されてしまうことも予想される。したがって、対人スキルの向上にむけて、ポジティブ関係コーピングの直接的・間接的効果や、そのメカニズムを理解するといった心理教育的な働きかけが必要であるかもしれない。

### ネガティブ関係コーピングについて

分析の結果ネガティブ関係コーピングは、女子の無気力的認知・思考を除くすべての心理的ストレス反応の表出に影響していることが示された。加藤 (2001a) では、ネガティブ関係コーピングは心理



的ストレス反応を増加させることが実証されたが、本研究結果もこの知見と整合的であり、ネガティブ関係コーピングは、総じて心理的ストレス反応の表出に関与するといえるだろう。

ネガティブ関係コーピングは、相手を不快にさせることで関係が悪化したり、得られるソーシャルサポートが減少することにより孤独感を高める、といった結果ももたらされる（加藤，2002a，2006a）。対人ストレスコーピングに限らず、友人関係のストレスラーに対する回避的なコーピングは心理的ストレス反応を高めることが、多くの研究の結果明らかとなっている（松崎・小林，2004；三浦・上里，2002；水野・石原，2000）。さらに、不機嫌・怒り感情や抑うつ・不安感情といった情動的な心理的ストレス反応は、引きこもりや無気力、攻撃行動といった二次的ストレス反応を引き起こすことも示されている（岡田，2002）。これらの知見を踏まえると、ネガティブ関係コーピングは本人の精神的健康に寄与しないといえよう。

なおこのような回避的コーピングは、問題焦点型あるいは情動焦点型といった、他のコーピングによって抑制されることも、先行研究で明らかとなっている（三浦・上里，2002など）。したがって、例えばリラクセーション技法を身につけ適宜実施するといった、他の適応的なコーピングに置き換えることを援助するといったアプローチが、中学生の対人適応を図る上で重要であると考えられる。

#### 解決先送りコーピングについて

分析の結果解決先送りコーピングは、男女いずれにおいても、心理的ストレス反応への影響が示されなかった。

大学生におけるこれまでの研究から、解決先送りコーピングは、自分が傷ついたり他者を傷つけたりする可能性といった精神的負担から回避できること（加藤，2005）、あるいは他者に好意的な印象を抱かせ、他者との良好な関係を築くのに寄与すること（加藤，2002a）により、ストレス反応を低下させることが分かっている。したがって、中学生においては対人ストレスをそのままにしておくことは精神的負担の回避とみなされないか、このようなコーピングが他者に好意的な印象を与えないことが考えられる。

ただし、ストレス反応の表出にも関与していないことから、解決先送りコーピングの機能は他のコー

ピングと質的に異なる可能性があり、そして発達段階によって変化する可能性が示唆される。例えば、加藤（2005）で解決先送りコーピングを実施するような働きかけが心理的ストレス反応の低減効果をもたらしていることが実証されているものの、中学生についてはこの知見は援用できないことが予想される。したがって、中学生の対人ストレスを低減するために習得すべきコーピングについては、さらなる知見の収集が必要であろう。

#### 今後の課題

これまでに述べた以外の課題として、まず本研究では、対人ストレスコーピングのいくつかに男女差が示されたが、その理由は明らかでない点があげられる。したがって、このような男女差がもたらされた理由に関する検討が必要であろう。

なお女子では、無気力的認知・思考にはいずれのコーピングも影響していなかった。先行研究によると、中学生の体験するストレスラーのうち、無気力的認知・思考の表出には学業ストレスラーが強く関与する（三浦・上里，1999；三浦・坂野，1996；岡安ら，1992）。牧・関口・山田・根建（2003）によると無気力の表出は、自身の行為によって得られる随伴経験の少なさに起因することから、勉強によっても成績がなかなか上がらなかったりすることが、無気力的認知・思考の表出につながることが推測される。したがって無気力的認知・思考は、特に女子においては学業ストレスラーからの影響を受け、対人ストレスの文脈では生起しないことが考えられる。この点も今後の検討課題である。

また対人ストレスコーピングの実行に関与する心理的変数として、楽観性や自尊心（加藤，2001a）、Big Five（加藤，2001b）、あるいはホープ（加藤，2006b）がこれまでに検討されている。したがって、中学生における対人ストレスコーピングの特徴をより詳細に検討するためには、心理的ストレス反応低減以外の効果と同時に、コーピングの実行に影響を及ぼす他の心理的変数との関連も検討していく必要があるだろう。

あるいは中学生の学年差に言及した先行研究によると、中学3年生が他の学年と比して、ストレスの程度（三浦・坂野，1996；黒沢・有本・斉藤・森，2004）や精神的不調群の割合（荒木田・高橋・青柳・金森，2003）が高い。また、中学生においては学年が上がるにつれ、友人関係が安定してくる

ことも分かっている（三浦・坂野，1996）。よって、対人ストレスコーピングの学年差とストレスへの影響度に関する検証も必要である。

## 文 献

- 荒木田美香子・高橋佐和子・青柳美樹・金森雅夫（2003）．中学生の精神的健康状態とその要因に関する検討—第一報 3年間の縦断調査—小児保健研究, **62**, 667-679.
- 藤村元太・平野嘉彦・藤猪省太・服部洋兒・金子修己・村松常司（2007）．中学生の対人ストレスイベントと対処行動に関する研究—愛知教育大学保健環境センター紀要, **6**, 3-14.
- 藤野京子（1996）．非行少年のストレスについて—教育心理学研究, **44**, 278-286.
- 橋本 剛（1997）．大学生における対人ストレスイベント分類の試み—社会心理学研究, **13**, 94-75.
- 飯田順子・石隈利紀（2006）．中学生の学校生活スキルと学校ストレスとの関連—カウンセリング研究, **39**, 132-142.
- 加藤 司（2000）．大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成—教育心理学研究, **48**, 225-234.
- 加藤 司（2001a）．対人ストレス過程の検証—教育心理学研究, **49**, 295-304.
- 加藤 司（2001b）．対人ストレスコーピングとBig Fiveとの関連性について—性格心理学研究, **9**, 140-141.
- 加藤 司（2002a）．対人ストレス過程における社会的相互作用の役割—実験社会心理学研究, **41**, 147-154.
- 加藤 司（2002b）．短縮版対人ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検討—神戸女学院大学学生相談室紀要, **7**, 17-22.
- 加藤 司（2003）．対人ストレスコーピング尺度の因子的妥当性の検証—人文論究, **52**, 56-72.
- 加藤 司（2005）．心理的ストレス反応の低減に及ぼす対人ストレスコーピングの訓練の効果に関する研究—看護学生を対象に—心理学研究, **75**, 495-502.
- 加藤 司（2006a）．ポジティブ関係コーピングと精神的健康—ポジティブ関係コーピング尺度の作成—東洋大学社会学部紀要, **44**, 85-101.
- 加藤 司（2006b）．対人ストレス過程における対人ホープと対人ストレスコーピングが果たす役割の検証—健康心理学研究, **19**, 25-36.
- 菊島勝也（1999）．ストレスとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響—性格心理学研究, **7**(2), 66-76.
- 黒沢幸子・有本和晃・斉藤香織・森 俊夫（2004）．中学生の仲間関係、および心理的発達とメンタルヘルスに関する縦断的研究—3年間の継時的変化と性差の観点から—目白大学人間社会学部紀要, **4**, 15-27.
- 牧 郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男（2003）．主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響—教育心理学研究, **51**, 298-307.
- 松崎多千代・小林 真（2004）．中学生の学校ストレスとストレスコーピングの有効性—友人ストレスと学業ストレスに着目して—富山大学教育学部研究紀要, **7**, 19-26.
- Maybery, D.J., & Graham, D. (2001). Hassles and uplifts: Including interpersonal events. *Stress and Health*, **17**, 91-104.
- 三浦正江・上里一郎（2002）．中学生の友人関係における心理的ストレスモデルの構成—健康心理学研究, **15**(1), 1-9.
- 三浦正江・上里一郎（1999）．中学生の学業における心理的ストレス—高校受験期に実施した調査研究から—ヒューマンサイエンスリサーチ, **8**, 87-102.
- 三浦正江・坂野雄二（1996）．中学生における心理的ストレスの継時的変化—教育心理学研究, **44**, 368-378.
- 水原喜子・石原金由（2000）．中学生の学業・人間関係ストレスに対する認知的評価とコーピングが心理的ストレス反応に及ぼす影響—受験の有無の関連性に着目して—児童臨床研究所年報, **13**, 21-34.
- 文部科学省（2008）．平成19年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果
- 文部科学省（2009）．平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果（小中不登校等）
- 野島正剛・三好和子（2004）．特性不安および生活上のストレスと中学生時の不登校傾向との関連—児童文化研究所所報, **26**, 29-41.
- 岡田佳子（2002）．中学生の心理的ストレス・プロ

セスに関する研究—二次的反応の生起についての  
検討 教育心理学研究, **50**, 193-203.

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直  
美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価と  
心理的ストレス反応との関係 心理学研究, **63**,  
310-318.

岡安孝弘・高山 巖 (1999): 中学生用メンタルヘ  
ルス・チェックリスト (簡易版) の作成 宮崎大  
学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要,  
**6**, 73-84.

尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺  
度の改訂—トランスアクションナルな分析に向けて  
久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-  
114.

Seiffge-krenke, I. & Shulman, S. (1993). Stress,  
coping and relationships in adolescence.  
Jackson, S & Rodriguez-Tome, H. (Eds.).  
*Adolescence and its social worlds*. Lawrence  
Eribaum Associates, 196-196.

鈴木真悟 (1988). 中学生の心理的ストレスと非行  
との関連に関する研究1—生活事件経験および発  
達的, 心理的变化に関するストレス要因としての  
分析 科学警察研究所報告 防犯少年編, **28**, 27-  
43.

鈴木真悟 (1989). 中学生の心理的ストレスと非行  
との関連に関する研究 2—対処資源および心理的  
ストレス反応と非行体験度との関連性 科学警察  
研究所報告 防犯少年編, **30**, 13-27.

(2009年11月 6 日受付)

(2009年12月22日受理)

